

伊方原発訴訟を支援する会 (連絡先: 〒530 大阪市北区西天満 4-9-15 第1神明ビル 藤田法律事務所内 Tel 06-363-2112, 口座大阪 48780)

判明した美浜3号「支持ピン事故」の重大性

玄海、伊方にも同じピンを使用

伊方住民ら町と県に「公開質問」

昨年10月17日、関西電力は、定期検査中の美浜3号炉で、制御棒をスムーズに上下させるために設けられている制御棒案内管を固定するボルト(「支持ピン」)の1本が折れ、そのボルトの一部が、蒸気発生器の入口にある「水室」で見つかった、と発表した。燃料棒の間を上下に動いて原子炉の運転を制御している長さ4メートルにも及ぶ制御棒の位置がずれると、運転不能といった事態も予想されるだけに、そしてまた、こうした事故が、発表された限りでは、これまで起きていなかっただけに、その実態や原因の究明が注目されていた。

ところが約4ヶ月後のさる2月24日、関西電力は、さらにこの事故の重大さを示す事態を発表した。すなわち、美浜3号炉内に使われていた合計106本の「支持ピン」の全部に、ヒビ割れなどの損傷が発見され、さらに、「支持ピン」以外に、「たわみピン」とよばれている制御棒案内管とつげボルトの2本にもヒビ割れが見つかったという。そして、これら損傷を受けたボルトは、「国産化」の線に沿って三菱重工業で製作されたもの

(玄海、伊方も同様)であり、この種の事故は世界で初めてのため、その原因も対策も不明であるということも明らかになった。

さらにこの関西電力の発表に追い打ちをかけるように、昨年10月から発足した原子力安全委員会の吹田徳雄委員長は、記者会見でこの事故を重大視していると発表した。朝日新聞などはこの記者会見を全く記事にしなかったが、そのことは推進側の戸惑いを示している。わが国では、原発でこれまで発生した事故は、すべて「小さなトラブル」として行政はじめ推進側で扱われてきただけに、今回の安全委員会の発表は、見せかけのものであったとしても与える影響は大きい。

控訴審公判日程

第3回

5月25日(金) 午前10時半

被告国側の答弁と原告住民側の反論

第4回

6月25日(月) 午前10時半

内容未定

こうした事態の波及を恐れた関西電力は、三菱製とウエスチングハウス社製のピンを半分づつ採用している高浜2号炉の運転を、予定されていた定期検査を1ヶ月早め、2月24日に停止した。また九州電力も、「運転連続記録300日突破」との宣伝でごまかしつつ、2月28日に玄海原発の運転を停止した。ところが伊方では、四国電力はそうした事態も知らぬ気に、定期検査予定の3月10日まで運転を続けることをきめていた。

このことを知った現地の伊方原発反対八西連絡協議会では、「支持ピン事故」の重大さについての学習会を開いた後、つぎの公開質問状を提示して、伊方町と愛媛県の責任を追求した。

公開質問状

吹田徳雄原子力安全委員長は、2月28日関西電力美浜原発3号炉の支持ピン破損事故を重大視しているとのべている。この事故は原子炉をコントロールしている制御棒の案内管を炉心で固定している支持ピン106本全部がちぎれたりヒビ割れていた事故である。原子力安全委員会が今回の事故を重大視しているのは、①原子炉の安全性に関係する部分で、同一部品のすべてが壊れた、②こうした重大な故障が定期点検してみるまでわからなかった、という二点にある。また、事故を起こした支持ピンは三菱重工業製で、伊方1号炉も使用していると公表されている。

私たち八西住民は、いま、この事実を知り、事態の重大さに背筋の凍る思いである。私たちは、住民の安全を守る町(県)当局に対し、次の点について公開質問を行う。

- (1) 町(県)当局はこのことについて、どう考えているか。

- (2) 町(県)当局は、どういう処置をとってきたか。

- (3) 伊方1号炉では、新聞報道のように、美浜3号炉で事故を起こした支持ピンを使っているのか。

- (4) 建設計画をしている伊方2号炉も同型のものを使うのか。

1979年3月6日

伊方町長(愛媛県知事)殿

伊方原発反対八西連絡協議会

3月6日朝、矢野浜吉さんら7名の住民代表は、山本町長あての公開質問状を持って伊方町役場に出向いた。町側は、福田助役があらわれ、科学技術庁から愛媛原子力連絡調整官として派遣されている木下氏も立会った。福田助役は、質問状の第3項について、「同じものを使っている」と答え、第4項については「知らない」と答えたが、第1および2項については、「専門的なことで私たちには分らない。国が責任をもって行う10日から定期検査でははっきりするだろう」と「安全協定」の一方の当事者の責任を回避した答弁をくり返すだけであったという。

これに対し住民代表らは、「支持ピンの損傷は、たとえば、自動車のブレーキの故障のようなものだ。同じものを使っている伊方もすぐ対処する必要があるのに、町が何もしないというのはおかしいではないか」と、口口に町の無責任さを追求したが、町側は言を左右にするだけ。結局、改めて文書で回答するよう申し入れて住民側は引上げた。

なお同席していた木下連絡調整官は、支持ピンの位置などを説明しつつ、「支持ピンは土台が残っていれば固定の役割を果たす。定検を早める程の重大な事故ではない」と、全

く根拠のない“解説”で住民らを煙に巻きつ
つ、四国電力の運転継続に許可を与えている
ことをほのめかしたという。さらに、燃料棒
の損傷のため1月に運転停止する予定であっ
たが、住民らに追及され、「危険はない」こ
とを示すため強引に3月まで運転継続するこ
とを余儀なくされた四国電力や国は、何が何
でも「異常なし」の実績を残すことが、伊方
裁判のためにも必要だったのであろう。

続いて3月8日には、白石愛媛県知事あて
の公開質問状を持った住民代表が県庁を訪れ
た。これに対し県がどのように対応したかは
読売新聞の愛媛版に出た「県は何におびえて
いるのか」と題した以下の記事がよく伝えて
いる。

「関西電力美浜原発3号炉の制御棒案内管
支持ピン損傷に関連して、8日、伊方原発反
対八西連絡協議会の矢野浜吉さん(75)と
広野房一さん(66)の二人が知事あての公
開質問状を携えて県庁を訪れた。内容は、さ
きに伊方町へ出したのと一緒だ。

矢野さんらは、社会党の岡本博県議を通じ
て生活環境部の部長、次長、公害課の課長、
課長補佐に会おうとしたが、いずれも「外出」
「会議」で留守。30分ほどしてやっと公害
課の課長補佐に連絡がとれた。しかし「これ
まで何度か話し合ったが、平行線をたどるだ
けで収まりがないので、基本的には伊方の人
(原発反対派)とはお会いできません」と会
見を拒否された。最終的には岡本県議をまじ
えた話し合いで、課長補佐が質問状を「預か
る」形で、一応の決着がついたが、この間、
県庁の出入り口や廊下に、公害課や管財課の
職員10数人が“張り番”に立ち「暴力団と
間違えているんじゃないか」と、岡本議員が

抗議する一幕も。

矢野さんは「知事が保内町で演説したとき
いつでも県庁へ来てくれと言った。会えない
というのが知事の指示なら政治的に重大な問
題。職員の判断で会わないというのなら、公
務員としてあるまじき行為」と憤慨、広野さ
んも「ちょっと押したら倒れそうな年寄り二
人が質問状を持って来ただけなのに、何にお
びえとるんじゃないやろうか」と苦笑した。

公害課は、昨年暮れにも「責任者不在」で
6時間も待った矢野さんらに会わなかった
“前例”がある。住民の側に立って企業の監
視を強め、公害を未然に防ぐのが仕事のはず
で「反対派だから」と逃げたり会わなかつた
りすれば、かえって行政に対する不信と原発
に対する不安をつのらせるのではないか。」

美浜3号炉で発見された支持ピン損傷事故
は、原発推進派に大きな衝撃を与えたものと
予想される。これまで、とくに加圧水型原発
(PWR)については、国産化率の高いもの
ほど稼働率も良く、美浜1号炉などで傷つけ
られた名誉を挽回する“優等生”であるとし
て、電力会社はじめ推進派の熱い期待を集め
てきていた。美浜3号炉と玄海1号炉は、そ
の代表であった。しかし、これまで、蒸気発
生器細管事故などのため満足に働いたことの
ないPWRが、本格的に運転を続けた場合、
厳しい使用条件にさらされている原子炉圧力
容器や、原子炉内の構造物に、より本質的な
欠陥が露呈するだろうと、批判的な専門家
の間では予想されていた。今回の「支持ピン事
故」は、まさにその一つのあらわれと言える
だろう。

「支持ピン事故」の技術的な重大さは、次
の二点であろう。第1は、原子力安全委員会

も指摘しているように、106本のすべてのピンがやられていたということである。このことから、ピンの材料や製作過程に含まれている原因のために、ピンの強度が制御棒案内管にかかる設計上も予想された力に耐えられなかったのか、あるいは、ピンは設計通りに作られていたが、原子炉内の構造物に、炉心で発生する激しい振動や歪によって、設計で予想されなかったような異常な力が作用したか、のどちらかであろうと予想される。

いずれにしても、いきなり実用炉に使用するという無茶なやり方である上に、安全上もきわめて重要な部分であるだけに、ただ新しいものと取りかえるといった方法をくり返しても、原因の究明も、したがってその対策の確立もおぼつかないであろう。

第2の重大な点は、これも安全委員会も指摘しているようにちぎれたピンの一部(発表では径約3センチメートル、長さ約5センチメートル)が「異物」として、原子炉内でとびはねていたという事実である。このため原子炉内の構造物の柱や管に損傷を与えていた可能性も大きい。発表では、支持ピンがちぎれていることを定期検査で発見したことになるが、そうではなくて、とびはねたピンによる何らかの破損を検知し、あわてて原子炉を止めたのではないかと推測している専門家もいる。原子力安全委員会が、異物の探知法を考えるよう指示していることも、そうした推測を裏づけているように思われる。異物の探知も、言うは易く行いは難し、である。また、たとえそれができたとしても、すべてのピンがヒビ割れ、破壊寸前であったという、まさに「背筋の凍る思い」の事態を検知するのには何の役にも立たないことはい

までもない。美浜3号炉の場合、たまたま一つのピンの破壊が異物として検知されたからよかったものの、もし、すべてのピンがヒビ割れているところに、たとえば地震などによる急激な力が加わった場合には、ピンの一斉破壊による原子炉コントロールの不能といった最悪事態も招くであろう。

いずれにしても、「支持ピン事故」の真の原因を明らかにし、その対策を確立することは容易ではない。「稼働率低下の谷底を脱出した」との推進派の期待は、当分、実現しないであろう。しかし、原因不明の「支持ピン事故」究明のため、蒸気発生器細管事故の場合と同様に、実用炉を用いた危険な試行錯誤が恐らく続けられることであろう。そしてその際、今は「初仕事」でハツスルしているかに見える原子力安全委員会が隠れミノとしての役割を果たすことも十分予想される。伊方はじめ各地のPWRの運転再開をめぐる、住民と電力、行政との間で激しい攻防が続くことであろう。(Q)

会計報告(79.2/15~3/15)

収入	
会費	54,000
ニュース購読料	68,100
コピー代金	21,000
カンパ	21,600
計	164,700
支出	
ニュース代金	28,000
郵送料	7,860
為替手数料	890
会場費	8,500
準備書面作成援助費	50,010
コピー料金	49,400
計	144,660
差引	20,040
	(借入金返済に充当)
借入金合計	384,474